

## 相克の歴史 ロシアとウクライナ

東京大学大学院人文社会系研究科教授  
池田 嘉郎

私の専門は歴史学ですので、もっぱらロシアとウクライナの歴史をお話しますが、この歴史が今の戦争にどうつながっているのかということにも触れます。

### 1. ロシア＝ウクライナ関係のはじまり

ウクライナという国は、1991年にソ連が崩壊してできたわけで、そういう意味でとても新しい国だと言えます。ただ、ソ連が崩壊して新しくできたという点ではロシアも同じですから、ロシアもウクライナも1992年から新しい国になったということになります。この二つの国は非常によく似ています。その結果、仲良くなる時もあるものの、互いに自分たちの方の歴史が古いとか、ここは我々の街だと争うなど、非常に複雑な関係にあります。



[https://www.u-tokyo.ac.jp/focus/ja/features/z0405\\_00169.html](https://www.u-tokyo.ac.jp/focus/ja/features/z0405_00169.html)

### 《共通の祖、キエフ・ルーシ》

元をたどると、9世紀の半ばキエフ・ルーシという国があり、これがロシア人やウクライナ人にとっての国の始まりということになります。ロシア人もウクライナ人も我々の祖先はキエフ・ルーシだと言うわけですが、ロシアとかウクライナという枠組みが9世紀からあったのではなく、ロシア人の祖先もウクライナ人の祖先も一緒だったのです。それがある時点から次第に、自分たちはロシアだ、自分たちはウクライナだ

882	キエフ・ルーシ成立（～13世紀半ば）
1237	モンゴル支配（「タタールの軛」）開始
1480	モンゴル支配の終わり
15世紀	ポーランド＝リトアニアの逃亡農民がステップ地方でコサック集団を形成
1654	ペレヤスラフ協定（ボグダン・フメリニツキーがロシア皇帝の宗主権を認める）
1783	ロシア、クリミア半島を領有（オスマン帝国から）

となっていくわけです

キエフ・ルーシというのはドニエプル河とヴォルガ河の辺りに広がっていました。ウクライナの真ん中を流れているのはドニエプル河です。ヴォルガ河はロシアの真ん中あたりを流れていますので、大抵現在のウクライナとロシアの辺りにキエフ・ルーシ国があったわけです。この国に今のロシア人やウクライナ人の祖先が暮らしていたのですが、彼ら自身が作ったのではなく、スウェーデンから来たヴァイキングが作ったのです。毛皮や蜂蜜などの貿易のため川伝いに下りてくる中で、ここを支配しようとして作ったのがキエフ・ルーシです。ただ、圧倒的に地元のロシア人とかウクライナ人の祖先の人たちの数が多いですから、百年もすればヴァイキングもロシア化していきます。

キエフ・ルーシという国は堅牢な国ではなく、バラバラになっていきます。例えば、ある公国の権力者に息子が複数いると、一人にすべてを相続させず、息子たち均等に分けるのです。これを繰り返して、次第にバラバラになっていきます。

### 《多くの公国の分立》

そうこうして12世紀頃までに、それぞれの都市を中心にキエフ公国、モスクワ公国、トヴェリ公国とか、12～13の公国に分かれていきます。ですから、キエフ・ルーシがロシアとウクライナのどちらの先祖かという、どちらの先祖でもあるのです。

### 《モンゴル＝タタールのくびき》

日本への元寇よりも少し早くモンゴルがやってきました。ロシアはバラバラで、あっという間に征服、支配されてしまいます。キプチャク・ハン国というのができ、カスピ海北方のアストラハン近くを首都とします。キプチャク・ハン国は、モンゴル帝国の一部のようなもので、これがキエフ公国とかモスクワ公国を支配するわけです。そして毎年、銀、毛皮、蜂蜜、蠟などの貢納を持ってこさせる。これが約 250 年続きます。ただモンゴル人は、モスクワとか、キエフ・ルーシの中心都市であるノヴゴロドとかに人を送って監視するような支配の仕方ではなく、自分たちの都に年に一度きちんと貢納を持ってくればよい、あとは基本的に自治でいいということなのです。そういう緩やかな支配で、自分たちの宗教を押し付けたりもしません。だから、モンゴル大帝国というのは長持ちしたわけです。

### 《ポーランド＝リトアニアの台頭》

この後、モンゴルの支配が続く一方で、ポーランドが出てきます。ポーランドは当時の大国リトアニアと連合しており、非常に強力です。これが台頭してくると、モンゴル支配下の公国でも西の方にあるキエフ周辺などは 13 世紀前半からポーランド＝リトアニアの支配下に入り、ここで運命が分かれます。キエフやウクライナのあたりは、基本的にポーランド＝リトアニアですからヨーロッパなのに対し、モスクワとかいわゆるロシアの側はモンゴル支配のままということです。

### 《コサック国家の成立》

キエフ周辺はモンゴルの侵攻で破壊され荒野になっていたのですが、ここにコサックが入ってきます。彼らはもともとは、タタール系（モンゴルの人々）の軍脱走者とかポーランド＝リトアニアから逃げてきた農奴とかです。コサックというのは「群れを離れたもの」、要するに本体から離れてさまよっている人たちを指します。

コサックにはタタール系とポーランド＝リトアニア系がいるわけですが、次第に混じっていきます。ポーランド＝リトアニアの逃亡農奴といっても、農民はだいたい地元の人々で、基本的にロシア人とかウクライナ人とかスラブ系です。スラブ系の農民とモンゴル系の軍脱走者が融合して、我々がイメージするコサック、すなわち乗馬が得意で勇猛果敢な人々になるわけです。

この人々がキエフのあたりから黒海北岸にかけて活躍し、これが現在のウクライナの基盤とっていいと思います。ウクライナの国の名前もこの頃にできてきます。ウクライナという国名の語源は諸説あり、現代のロシア語だとまずは「田舎」という意味になるので、ロシア人はウクライナを田舎だと軽んじることがあります。しかし、「田舎」ではなく「故郷、いなか、くに」という意味もあります。

### 《ロシアの興隆とウクライナの併合》

他方モスクワはどうだったのでしょうか。モンゴル帝国も永遠の帝国ではなく、仲間割れと兄弟げんかが始まり次第に弱っていき、15 世紀後半になるとロシア人たちは自立したいと考えはじめます。いくつかの公国に分かれていたうち、台頭してきたのがモスクワ公国です。同国は西欧にならない長男に全て継がせる方式に他公国に先んじて切り替え、トヴェリ公国とかを併合して強力になっていきます。今日のロシアの起源は、このあたりではないかと思っています。

このモスクワ国家が、非常に強力な力でコサックの国ウクライナを併合するのが 1654 年で、このあたりからロシアがウクライナを支配することになっていきます。かつてのキエフ・ルーシの後継者のような感じになっていくのです。ただ、ウクライナを併合するといっても最初の頃は、併合したから完全に従えとか、すべてロシア側のルールに従えとかはありません。現代の世界と違い、17 世紀頃は結構緩やかでした。1654 年のペレヤスラフ協定で、コサックのリーダーであるボグダン・フメリニツキーがロシア皇帝の宗主権を認めたわけですが、これはどういうことか。コサックの人たちの支配者はポーランド＝リトアニアであり、コサックの人たちはこの支配から逃れたかったわけです。ポーランド＝リトアニアと戦うためにはロシアの手助けが必要で、協定を結んだのです。

この協定についても、ロシアとウクライナで見方が違います。ロシア側は「ペレヤスラフ協定によってウクライナは完全にロシアのものになった」「自発的にロシアに従ったのだ」と主張します。しかしウクライナ側は、「ポーランドと戦っていたからロシアの側につくと言っただけであり、条件が変わればコサックの自由な国に戻る」とし、この協定でウクライナの運命が決まったとは全く考えていま

せんでした。少しするとウクライナのコサックが反乱を起こします。ここで当時の国際関係を見る必要があります。ポーランド＝リトアニアとロシアとウクライナの関係に加え、クリミア・ハン国の存在がありました。キプチャク・ハン国の後継国のうち弱体な国は16世紀にイワン雷帝に次々に征服されますが、唯一残るのがクリミア・ハン国です。これが結構強力な国家で、ウクライナのコサックは、モスクワとクリミア・ハン国を天秤にかけるわけです。

### 《強権の女帝エカチェリーナ2世》

この状況を変えるのが女帝エカチェリーナ2世です。ドイツ出身で、先進国であるドイツのやり方を導入しました。これからは君主がすべての地域を押さえ、国家を強力にしていかなければならない時代が始まっているということを強く意識していました。これからはウクライナに勝手なことをさせないということです。この背景には南下政策があります。ロシアの北方の港は冬になると凍ります。南に出て暖かい港から黒海、地中海を抜ければ穀物を輸出でき、ロシア全体の国力を高められます。ところが、黒海にはクリミア・ハン国があり、その手前にウクライナがあつて、これがどっちの味方か分からないのは困るわけです。彼女はウクライナに対して、ロシア側のルールに従うことを強制し、ウクライナの地名もなくし完全に併合します。さらにクリミア・ハン国も打倒し、新しい都市を黒海沿岸、クリミア半島に次々に作っています。オデッサ、セヴァストポリ、マリウポリなどは、全部エカチェリーナ2世が作ったもので、ギリシャ系の名前が付けられました。

しかし、これをもってロシア人がウクライナ人を支配したと考えられるのかということ。エカチェリーナ2世の頃のロシア帝国は、必ずしもロシア人が強い帝国ではなく、大事なものは身分制でした。貴族が一番偉い、農民は地位が低いという世界です。民族とは関係なく、エカチェリーナ2世やその前のピョートル1世を手助けし勲功があつた者たちが貴族として地位が高いわけです。ロシア人もいますが、結構多いのがドイツ人です。元キプチャク・ハン国のタタールのエリートたちもロシアの貴族になっています。18～19世紀頃は、貴族の中にいろいろな民族が混じっており、農民の中にはロシア人もいればウクライナ人もいる世界なのです。これが続いていると、ロシア人対ウクライナ人にはならなかったわけですが、19世紀の後半からナショナリズムの時代がやってきます。

## 2. ロシア帝国からソ連へ

19世紀の後半から、貴族に生まれたから偉い、農民に生まれたから身分が低くこき使われるのはおかしいのではないかと、同じ人間として生まれれば、みんな同じ市民じゃないかという考えが出てきます。最初は1789年のフランス革命で、この考え方が半世紀くらいかけてヨーロッパに広まっています。

1876	エムス勅令 (ロシア帝国政府がウクライナ語の使用を厳しく制限)
1905	第一次ロシア革命: ウクライナ自治運動の高揚
1914	第一次世界大戦開始 (~1918)
1917	ロシア革命
1918	ウクライナ人民共和国成立 (~1920)
1922	ソヴィエト社会主義共和国連邦 (ソ連) 成立

### 《ウクライナ知識人の自治要求と帝国政府の弾圧》

ロシアの場合はナショナリズムがヨーロッパに近いウクライナにまず入ってきます。ウクライナの知識人は、ロシアとウクライナでは言葉が違う、歴史も違う、我々はコサックから始まっている、独自のウクライナ人ではないかということになってきます。ウクライナは別に分離独立とかは言いません。19世紀頃は大帝が支配し、小国・小民族はその下で庇護されているのが前提なのです。我々は自治がほしい、ウクライナ語を使いたい、キエフ県とかじゃなくウクライナという一つの単位として区切ってくれといったことを要求するようになります。

これに対しペテルブルグの帝国政府は、これからもロシア帝国は身分制でいく、ウクライナ人だけに勝手な事はさせないと強硬です。そんなことになったら、ウクライナに続き、グルジア、ベラルーシとロシアはバラバラになってしまうと、ウクライナ人の要求を一切無視し弾圧します。面白いのは、ロシア人の知識人の考え方です。ロシアにも当然、皇帝がいつまでも強いのは嫌だ、もう少し自由に発言したいというのが出てくるのですが、必ずしもロシア人だけでまとまろうとは言わないのです。それを言うと、帝国がバラバラになるのを恐れるわけです。ロシアの革命派とか改革派は、革命や改革を求めている点では皇帝政府に批判的ですが、やはりロシア帝国全体が一体の方がいいということ

なのです。したがってロシアの知識人やリベラル勢力は、自治や連邦制にも否定的でした。

### 《ロシア革命と短命なウクライナ人民共和国の誕生》

そうこうしているうちに、第一次世界大戦とロシア革命という大激動の時代に入ります。戦争というのは国民全体が団結しないと勝てないものですが、そもそも身分制でバラバラのロシア帝国に勝ち目はなかったのです。結局下層階級の不満が溜まりに溜まって爆発し、ロシア革命になります。2月革命で帝政が崩壊しますが、それだけでは終わりません。あまりにも社会がバラバラで、帝政が壊れたからみんなで団結しようとはならないのです。農民は農民、労働者は労働者、ウクライナ人はウクライナ人とバラバラになっている隙を突いて、誰も考えていないような社会主義革命を実行したのがレーニンの10月革命です。

レーニンは労働者と農民の支持を得て革命をやったような話になっていますが、実際には2月革命後の大混乱の中で唯一、自分たちが政権をとれば戦争も終わる、すべて幸せになる、大丈夫だと、ポピュリスト的にバラマキ政策のようなことを言って、貧しい人たちの支持を得たのです。農民には土地を、労働者には工場をやる、独立したいならすればいいなどと言ったものですから、ウクライナ人やグルジア人の反発もなかったわけです。そうやって10月革命は成功するのですが、レーニンが目指しているのは社会主義革命であり、ヨーロッパ全体で革命が起こると言うのです。しかし、ウクライナ人はウクライナが自立できればそれでよし、農民は土地が、労働者は工場がもらえればそれでおしまいであって、社会主義革命だと言っているのは、レーニンとその仲間の共産党だけでした。ロシアは共産党のロシアになりますが、ウクライナとかベラルーシとかみんなバラバラになっていきます。ウクライナの知識人たちは、1918年にウクライナ人民共和国という国を作ります。今日のウクライナ国家が直接の起源としているのはこれです。ところがウクライナ人民共和国はすぐ潰されます。

### 《内戦中の大混乱》

やがて内戦が始まります。レーニンの共産党は社会主義革命だと言い、ついていく人はそれほど多くないものの、農民や労働者は地主や企業家が戻るよりはレーニンの方がいいと味方をしました。この内戦には、昔の地主とか企業家だけではなく、昔の軍人とか外国勢力が絡んできます。第一次世界大戦の途中、一緒にドイツと戦っていたのに勝手に抜けたロシアに、イギリスやフランスや日本は軍隊を送ります。日本の場合はシベリア出兵です。大混乱の中でウクライナ人民共和国は、単独では生きていけないとドイツに頼り、ドイツによって傀儡国家のようにされてしまいます。それを跳ね返そうとか、本当にいろいろなことが起こります。1918年から1921年の間にキエフへは何度も様々な勢力が入ってきます。レーニンの共産党、ウクライナの人々、ドイツ、農民ゲリラとかです。

### 《ソヴィエト連邦の成立》

結局、レーニンの共産党政権が労働者と農民の力を借りて赤軍を作り、ウクライナを再征服します。ソヴィエト連邦ができるわけですが、これは自発的に諸民族がレーニンのもとに結集したとかではなく軍事的征服です。ソヴィエト連邦は連邦国家であり、レーニンとしては、ウクライナという国があった方がウクライナ人は納得するだろうと考えたのです。あくまでも共産党が支配する、形の上では



別の主権国家の連合体がソヴィエト連邦なのです。ただ1920年代は、レーニンにしてもスターリンにしてもロシアとの一体化を無理強いすることはなく、共産党に従う限り民族の文化を大事にすることが認められました。1920年代は、ウクライナの映画や文学が大いに盛んになり、映画では、ドヴジェンコの『大地』といった傑作が生まれました。『大地』(1930) [ロンム・トラウベルク編『ソヴィエト映画芸術 1919 - 1939』]

## 3. スターリン時代とその後

いろいろなことが変わるのにはスターリンの時代です。1930年代の初め頃からスターリンは、モスクワの共産党指導の下で全てを一元化していこうとします。それまでのようにある程度自分たちの文化を追求することは、許されなくなっていくます。エカチェリーナ2世の強権的な体制と似たところがあります。そもそもロシアは、枠を守る限りある程度までは許容される時代と、中央の言うとおりに

やれという時代の繰り返しです。スターリンにしてみると、ひとつは日本とドイツなのです。日本が満州事変を起こし、ナチスドイツも1933年から出てくる。どちらもソ連が嫌いだと言っている。こういう国に挟まれていたら、やはり団結を高めなければならないとなります。

1920年代の割と自由にやっていたという政策は、革命前からのウクライナ系やグルジア系の知識人を呼び戻すための政策でしたが、スターリンの下では共産党と違う奴らが入っているとなってきます。そして1920年代にウクライナ文化を盛り立てた人たちが弾圧され始めます。具体的には、ロシア語とよく似ているものの文字が微妙に違うウクライナ語の文字は使うなどとなってきます。スターリンはエカチェリーナ2世とは違い、ウクライナやウクライナ語が存在しないということまでは言いませんが、なるべくウクライナとロシアを近づけたいわけです。

なおかつスターリンとしては、国全体が一丸となってナチスと日本に対抗し、ソ連が強大になっていく時、中核となるのはだれかとなります。これまではあまりロシア人、ロシア人と言わず、むしろ労働者とか農民という階級の話だけです。しかし、その中で誰がリーダーかとなったら、やはりロシア人じゃないかとスターリンは言い出します。何故かという、これから戦争が起こるというのに、労働者階級の団結とか社会主義革命というのは抽象的で分かりにくいのです。大半の住民に分かりやすいのは、自分たちの言葉、文化、伝統だろう。ロシア人としてのアイデンティティも大事だとスターリンが思いつくわけです。1930年代半ば頃から、ロシア人が民族の長兄、ウクライナ人が二番目、ベラルーシ人が三番目みたいな序列化が始まります。革命の初期には、プーシキンやトルストイは貴族であり古いと言っていたのが、ロシア文化として素晴らしいとなります。

- |                                      |
|--------------------------------------|
| 1930 年代初ウクライナを含むソ連各地で飢饉              |
| 1937 大テロル (1936~38) のピーク             |
| 1939 第二次世界大戦開始 (~1945) : 独ソはポーランドを分割 |
| 1941 独ソ戦開始 (9月、キエフのバビヤールでユダヤ人虐殺)     |
| 1953 スターリン死去                         |
| 1954 フルシチョフ、クリミア半島をロシアからウクライナに帰属替え   |
| 1985 ゴルバチョフ政権                        |
| 1986 チェルノブイリ原発事故                     |
| 1991 ソ連崩壊                            |

### 《農業集団化と大飢饉》

それと並行して、いろいろ悲惨な事件が起こります。まずは1930年代初頭の農業集団化です。レーニンもスターリンも小さい単位の農業は効率が悪い、大きい単位の方がいいと思っていましたが、レーニンが踏み切れなかったものをスターリンが強行します。ところが、集団化すれば効率が上がるはずが、実際には効率が悪くなります。どれだけ作ろうと全部国家のものなら働くのは嫌だとなったのです。特に家畜は、巨大な家畜小屋に集めた方が効率的だと、豚を押し込むだけ押し込んで誰も世話をしない。そもそも自分の豚や鶏を取られるくらいなら、食べた方がましだと大量の豚や鶏が殺されます。何十年もこの影響からロシア農村は脱却できないわけですが、ここに大飢饉が来ます。

ウクライナでは数百万人が死に、人肉喰らいといった悲惨な話になります。問題はこの大飢饉の評価です。ロシアの学界では、大飢饉はロシアでも起こり同じように飢えが出た。スターリンがあえてウクライナ人を狙い撃ちしたわけではないというのが定説です。一方ウクライナの学界では、これは強力なウクライナ人を根絶やしにするためのスターリンの人為的な政策だというのが定説になり、これをホロドモールと呼びました。ホロドは飢餓、モールは死ぬことです。今回の戦争までは、世界各国の研究者の多くは狙い撃ちはないだろうと言っていたのが、戦争が始まりロシア人のやっていることがあまりに滅茶苦茶なので、やはりロシア人がウクライナ人を狙い撃ちしたのかというイメージが出てきています。実際にはスターリンはグルジア人ですし、狙い撃ちは違うのではないかと思います。ウクライナ側の最近の説明も微妙に変わり、狙い撃ちかどうかは分からないが、スターリンの政策によって人為的に危機が発生し、特にウクライナでは大勢が死んだとしています。要するに歴史学といっても、ひとつの答えがあるわけではなく、立場によって違うのです。最近ではウクライナ学界の定説がメディアにも広まり、優勢になってきていると言えます。

### 《大テロル》

もうひとつ話題になるのは、スターリンが無実の市民を大勢迫害していることです。ひとつの理由は、ナチスドイツと軍国主義日本に挟まれて、スパイが大量に入り込んでいるのではないかと恐

怖心です。ドイツ系やポーランド系のソ連市民は裏切るかもしれないとシベリアに強制追放します。ロシア人はポーランドとウクライナをセットで考える傾向があり、ポーランドがドイツになびいたらウクライナも続くのではないかと思います。ポーランドは、モスクワやペテルブルクから見ると、すごく知的水準が高いバリバリのヨーロッパです。宗教もカトリック中心で文化的にロシア正教と違う。ポーランドは間違いなく敵であり、いざポーランドとことを起こす時にウクライナが逃げないように、なるべくウクライナの自律性を削いでおこうというわけです。

#### 《第二次世界大戦、東部ポーランドをウクライナに編入》

その後、第二次世界大戦が始まります。1941年からの独ソ戦の印象が強いのですが、第二次世界大戦は1939年9月からで、分けて考える必要があります。第二次世界大戦でソ連はナチスと戦い、大量の犠牲を出してナチスに勝ったと強調します。実際1000万以上の人が死んでいますから気持ちは分かりますが、1941年6月にドイツが攻めてくるまでの2年間、ナチスとソ連は独ソ不可侵条約で組んでいます。そのあたりが大事です。

スターリンは日本とドイツ両方から攻められるのが嫌で、強力なドイツと1939年の夏に相互不可侵条約を結びます。ヒトラーにしてみたらこれで遠慮なくフランスなどと戦える、スターリンにしても戦争の危険を回避できるということです。単に戦争しないというだけであればいいのですが、ポーランドを分割するという非常に帝国主義的なことが含まれています。1939年9月にまずドイツがポーランドの西部に侵攻、ちょっと間をおいてソ連がポーランドの東部に侵攻し、これで第二次世界大戦が始まるわけです。イギリスとフランスがナチスドイツに宣戦布告しますが、ポーランド東半分を取ったソ連に対しては何もしません。ソ連と戦争したら大変だからということです。1939年からの2年間は、ソ連はポーランドの東側を取った上で、英仏とも戦っておらず楽なのです。

東部ポーランドにはウクライナ人がたくさんいます。もともとコサックの国があり、それをロシアとポーランドが半々くらいにし、ポーランド側にもコサックが結構入っているわけです。ところがエカチェリーナ2世は18世紀末に、ロシアとプロイセンとオーストリアでポーランドを分割しました。その時にコサックの国のポーランドに行った部分がロシア帝国に入ってきたりしています。それだけでなく、オーストリア部分にも元ポーランドのウクライナ人がいるのです。オーストリアが第一次世界大戦で敗れバラバラになることでポーランドは独立します。独立したポーランドには、昔のコサック国家が結構入っており、ウクライナ人がたくさんいるのです。

そうするとスターリンとしては、元々コサックの国でウクライナ人もたくさんいるからと、東部ポーランドをウクライナに編入します。現在のウクライナは、この東部ポーランドの編入により、かなり大きくなっているわけです。ただ東部ポーランドは、そもそもロシアと何の関係もない地域です。歴史的に見て、スターリンが併合する前はポーランド、ポーランドの前はオーストリア帝国なわけです。なので、ハプスブルクの比較的緩やかな世界の方に馴染みがあるわけです。その点、ウクライナの東半分は、エカチェリーナ2世の時からずっとロシア人の下におり、ロシアの無茶苦茶にいわば比較的馴れているのです。

#### 《バビ=ヤールの虐殺》

東部ポーランドが編入され、この時にウクライナに住んでいるユダヤ人がひどい目に遭います。1941年6月、ドイツはソ連に攻めてきます。スターリンは不意を突かれたことになっていますが、日本に潜り込んでいるソ連のスパイゾルゲを通じて実は知っていたのではという説もあります。スターリンが油断している間にドイツがソ連領内に入ってきて、ポーランド分割時の部分だけでなく、もともとエカチェリーナ2世の頃からの部分も含め、ウクライナの大半がナチスに占領されていきます。キエフも占領されます。ちなみにキエフは、1667年からロシアサイドに入っており基本的にロシアが長いわけですが、キエフよりも西の方はそうではないのです。

ドイツはウクライナに対してナチス的な体制を敷くわけですが、ウクライナ人してみるとスターリンが1939年に併合した部分にナチスが来たというわけです。この地域はスターリンに併合されてから2年しか経っておらず、ソ連のことが嫌いでもたまらないところです。そして、ソ連共産党の手先がユダヤ人だったと考えるのです。ユダヤ人は常に差別されてきたことから革命家が多く、ソ連共産

党にもユダヤ人革命家が多くいました。ソ連共産党は基本的にはユダヤ人にかなり配慮したのです。2年間だけソ連に併合されていたウクライナの西部で、ドイツが来たということで、ユダヤ人に対する復讐が始まります。町中のユダヤ人が連れ出されて迫害されます。さらにキエフでもナチスドイツはユダヤ人狩りを始めるわけです。ウクライナ人はユダヤ人がどうなるか見ているのですが、助けようとはしませんでした。1941年9月、キエフのバビ＝ヤールでユダヤ人虐殺が起こります。バビ＝ヤールの谷にユダヤ人を集め荷物とか全部出させた上で、機関銃でどんどん殺していきました。この後でソ連が押し返し、バビ＝ヤールで虐殺があったのが分かります。ですから、ユダヤ人が一番苦しんだのです。

もちろんウクライナ人も、ナチスにいろいろ嫌なことをされたのですが、ナチスと組んでユダヤ人を迫害したウクライナ人もいるわけです。これはウクライナ人にとってマイナス面で、ウクライナのインテリの中には映画監督のロズニツァのように、そのことをきちんと言直すべきと言う人はいます。常にウクライナ人はロシア人やナチスの犠牲者だったと言っているだけではダメで、自分たち自身がユダヤ人を迫害したこととか、バビ＝ヤールの虐殺時にも彼等を助けようとしなかったことを直視すべきと言っています。戦争が終わり、結局ウクライナはポーランドから奪った部分も加えてより大きな国になりました。

### 《スターリンの反ユダヤ主義》

バビ＝ヤールの虐殺があったのに、スターリンはユダヤ人にあまり配慮しませんでした。もともとユダヤ人があまり好きじゃないからです。トロツキーなどの共産党内でのライバルは、ユダヤ人系のインテリが多かったわけです。ドイツ語やフランス語ができて亡命経験も長く、マルクス主義の文献もたくさん読んでいて演説がうまい人たちで、彼らは革命までは輝いているわけです。スターリンの方は、ずっと国内で地下活動ばかりやっているわけです。レーニンのためにお金を稼がなければならぬと銀行強盗までして、捕まってはシベリアに送られて脱走しての繰り返しです。スターリンにしてみれば、本当に革命運動を支えてきたのはどちらだという気持ちがあり、1920年代にはトロツキーたちを次第に排除していきます。戦後になってスターリンがはっきりと反ユダヤ主義的な傾向を強めてくるのは、イスラエルができたことが大きな要因です。イギリスが第一次世界大戦でオスマン帝国と戦うために、アメリカのユダヤ人に金を出してくれれば戦後にユダヤ人の国を作ってやると言い、アラブ人にも手伝ってくれとアラビアのロレンスとかが動いたわけです。ところが、約束を破って結局イギリスが支配し続けたのが1920～1930年代です。第二次世界大戦が終わり、ユダヤ人がもう我慢できないとアラブ人を追い出して国を作り始めます。アメリカ系のユダヤ人が多いのでアメリカが手伝ったので、イスラエルとアメリカの関係は当然いいわけです。

ソ連は最初それほどイスラエルを敵視しなかったのですが、1947年頃から冷戦構造がはっきりしてくると、イスラエルは敵だ、ユダヤ人は敵だとなってきます。スターリンは国内のユダヤ人に対してもイスラエルやアメリカの手先ではないかと疑うわけです。バビ＝ヤールの虐殺はタブーとなり、溪谷は埋め立てられます。ユダヤ人だけが気の毒だったというような特権的な地位を与えたくないわけです。

### 《スターリンの死》

スターリンが1953年に死にます。それまで、ウクライナ人であろうがグルジア人であろうが、勝手なことをしたら殺されるので戦々恐々としていましたが、後任がフルシチョフとなると、原点に戻って自由な社会主義を作ろう、ある程度ウクライナとかグルジアとかの文化も大事にするという1920年代の雰囲気少し戻ってきました。

### 《クリミアのウクライナへの帰属替え》

フルシチョフがやった中で一番理由が分からないのがクリミアの帰属替えです。クリミア半島は当時ソ連の中のロシアという共和国の一部ですが、これをウクライナに帰属替えしたのです。ソヴィエト連邦の中で、基本的にはロシアだろうがウクライナだろうが、モスクワが全て支配していますからあまり関係がなかったのですが、今になってこれが問題になっています。1954年というのは、初めてウクライナがロシアの側についたペレヤスラフ協定から300周年で、それを記念したということにな

っています。しかし、フルシチョフはまだ共産党の中で権力基盤が弱く、強力なウクライナ共産党を味方につけたかったからという説もあります。また、彼がウクライナとの関係が深いからという説もあります。ウクライナの血が入っていますし、第二次世界大戦中にウクライナにいて、ウクライナが戦場になり一番被害を受けたことに同情していたという考えです。それと、クリミアはウクライナに属した方が地域的にも経済単位としても合理的だという説もあります。とにかくフルシチョフは、基本的にウクライナに対して甘かったし、それは後任のブレジネフも同じです。

#### 《平和なブレジネフ時代》

ブレジネフは、地元のことは地元の人が自由にやっけていい、自分の子供を出世させるとか、自分の仲間だけを幹部にしても構わない、その代わりにモスクワを立てるよというスタンスです。フルシチョフは改革派でもあり、怠けている共産党員を首にし、共産党を農業部門と工業部門に分けるとか、いろんなことを次から次へとやるので、地方の役人たちは困っていましたが、後任のブレジネフは地方のことに口出ししません。大戦争もなければ、わけの分からない改革も、キューバ危機のようなこともない。今となっては、ブレジネフ時代が一番平和な時代でよかったとみんな言っています。ブレジネフの時代、ウクライナはソ連第2の共和国として安定しています。ロシアから東ヨーロッパに石油や天然ガスを送る途中に位置しており石油も手に入る。ただ、ウクライナは石油資源が乏しく、なんとか自分たちのエネルギーを考えようと、かなり早い段階から意識的にエネルギー政策を始め、チェルノブイリ原発ができるのです。当時、原発は科学的なクリーンエネルギーだったわけで、チェルノブイリがあるということは、変なものを押し付けられたとかではなく、最新のハイテクで原発を最初に作ったということなのです。

#### 《ペレストロイカ》

ペレストロイカでゴルバチョフが改革を唱えますが、これは計画経済に伴う生産性の低下が目撃されるほど顕著になったことに加え、1985年の石油価格の暴落が背景にあります。ブレジネフの時代は、とにかく石油なのです。石油をシベリアで掘ってパイプラインを通して西ドイツあたりで売るわけですね。1973年のオイルショック以降の石油価格の高値に加え、シベリアの永久凍土から石油を採掘出来る技術が確立してきたのがそのころです。ところが1985年に石油価格が暴落し、翌年にはチェルノブイリ原発の爆発です。ゴルバチョフとしては強い危機感を持って改革を始めますが、各共和国の中には、そこまで言うのなら自分たちでやるという国も出てきます。

一番分離傾向が強いのはバルト三国でした。バルト三国はずっと帝政ロシアの一部だったのが、ロシア革命の時に逃げ出すことに成功し、1939年にスターリンに引き戻されてしまいました。バルト三国は1987年頃から独立すると言い出しました。続くのはグルジアです。グルジアもウクライナと同様、1918年から1922年まで独立国だったのが、赤軍が首都トビリシに入ってきて征服されたものです。グルジアの歴史はロシアよりも古いくらいで、ロシアからの独立を言い出します。

これに対し、ウクライナとか中央アジアはそれほど分離志向が強くありません。中央アジアの場合は、モスクワからの石油とかいろんな経済支援がありかなり近代化していますから、今更離れたくない。ウクライナの場合は、ソ連の中で第二位の地位にいました。長男はロシアだけど次男はウクライナ、三番目ベラルーシで四番目グルジアみたいな序列なわけです。だから、ソ連から分離する動きは弱いのです。ただ、分離しなくていいけれど、例えば地元の石炭をドイツに売った金はモスクワに吸い取られるのではなくキエフに落ちるようにしてほしいとまでは言いません。

ペレストロイカはかなりギリギリまで、ウクライナはどうするか態度を決めません。クリミアについても、ウクライナが自立した場合クリミアをどうするかということがあったのですが、ペレストロイカの間はゴルバチョフ対ロシアのエリツィンとウクライナのクラフチュクという構図の中で、まずはゴルバチョフを排除するのが先決で、クリミアの問題を巡っての争いはなかったわけです。こんなに関係がこじれるとは1991年時点では思ってもいなかったのです。1991年12月にゴルバチョフが完全に辞めてソ連がバラバラになります。最初のうちは割と仲良くやります。特にクリミア半島は、セヴァストポリというロシアにとって大事な軍港があり、ロシア側は使い続けたいわけです。ウクライナ側に残るもののロシアの使用を認めるといった協定が結ばれ、いい関係だったわけです。これは

エリツィン時代の話ですが、この時代は国の中がボロボロになってウクライナと喧嘩する余力などないというのが実情だったわけです。

#### 4. ソ連解体後

ところが、プーチン政権になって次第に原油価格が上がってきます。原油価格が上がるとロシアは強くなります。プーチンは 1990 年代には金をくれとアメリカに頭を下げていましたが、もうそんなことはしない、これからまた大国になると言い出します。エリツィン時代のいろいろな緩みを締めつけていくわけです。そして国内が徐々に権威主義化していきます。プーチンの反対派をつぶし、マスコミをつぶし、そして欧米と対抗するのだとなっていきます。

2000 プーチン政権成立
2010 ウクライナ・ヤヌコーヴィチ政権
2014 マイダン革命(ロシア、クリミア併合)
2022 ロシア=ウクライナ戦争

#### 《ウクライナの弱み、東部ウクライナと西部ウクライナ》

ウクライナとしては、ソ連のようになっていくロシアとはあまり付き合いたくなく、適当に距離を置こうとします。ただウクライナの弱みは、ロシアと同様汚職が多い上に、東部ウクライナと西部ウクライナがかなり違うということです。東部ウクライナは、1654 年からずっとロシアと一緒にいた部分です。西部ウクライナは、ずっとポーランドとかオーストリアの方において、スターリンが手に入れた部分です。西部ウクライナの言葉は純粋なウクライナ語に近いのですが、東部ウクライナはロシア人が結構入ってきており、ロシア語を喋るロシア系が多いのです。そういう人たちはプーチンのロシアともう少し仲良くした方がいいのではないかという考えで、彼らの支持をバックに 2010 年、かなりロシアに近いヤヌコーヴィチがウクライナの大統領になります。プーチンとしては、これでウクライナはこちらに来たとなるわけです。

#### 《2014 年マイダン革命》

ヤヌコービッチは地元の権益を大事にする古いタイプ。腐敗していたものですから、2014 年にマイダン革命というのが起こります。マイダンというのはキエフの広場のことです。もうヤヌコーヴィチは嫌だ、もっと EU のようになりたいということです。ウクライナの西の方の人や、特にキエフの都会派の人たちがマイダン革命を起こしてヤヌコーヴィチを打倒しました。ヤヌコーヴィチは直前の選挙で再選されているのですが、この選挙はデタラメだとなって、ヤヌコーヴィチはモスクワへ逃げ出します。それはプーチンから見ると、アメリカがやったんだと見えるわけです。実際、アメリカ大使館が動いていたのが盗聴されたりしましたが、だからといって、アメリカが全部をコントロールできるわけじゃありません。基本的にはウクライナ人がやったことです。ただプーチンとしては、「アメリカが介入して正当な政権を転覆させた。これ以降のウクライナは基本的にアメリカの傀儡であり相手に出来ない」となります。

#### 《クリミア併合、ドンバスへの介入》

この 2014 年にプーチンはクリミアとドンバスへの介入を始めます。まずクリミアには軍隊を送って完全に併合しました。クリミアはロシア人が一番多く、二番目にウクライナ人、三番目に多いのはクリミア・ハン国の末裔です。クリミアタタール人というムスリムで、彼らは強力なのですが、ウクライナ政府との関係も順調ではなかったのが、併合当初はさほどプーチンに文句を言わなかったように思います。さらにドンバス（ルガンスク州、ドネツク州）に介入します。プーチンとしては最初からどこまで狙っていたか分かりませんが、ルガンスクとドネツクは特にロシア語系住民が多いところです。彼らが独立したいと言うのだから、民族自決権を認めるべきだとしています。民族自決権があるから助けるとするのは全くおかしいとは言えないところがありますが、かなり軍隊を入れておりロシアが操作しているのは否めないで、どちらかというロシアの傀儡政権のようなものを作っているという気がします。ドンバスではずっと戦闘が続いていたわけです。

我々は 2022 年にロシア=ウクライナ戦争が始まったと思っていますが、ウクライナ人からすると、2014 年から戦争が始まっているわけなのです。2014 年には欧米もロシアに対してあまり厳しいことを言いませんでした。経済制裁はしましたが、今ほどウクライナへの軍事支援はしていません。もちろんプーチンがかなりスムーズにクリミアを取ってしまったこともあります。このころのウクライナ

自体が、国としてかなりガタガタだったわけです。腐敗や汚職が多い、地域のビジネスマンは自分の地域のことしか考えない、東と西の差も大きい。ウクライナも気の毒だけれども、元々クリミアはロシアのものではないかと、かなりウクライナに冷たい視線があったのではないかと思います。

その後出てきたゼレンスキーは、2017年に、ウクライナは一つのウクライナになるべきだ、ルガンスクとかドネツクのロシア系の人たちも住みよいウクライナにしてもう一度一緒にやろうと訴えたのです。クリミアが侵攻された2014年時点では、ウクライナ軍はボロボロなのですが、ゼレンスキーになる前からNATOに協力してもらって軍の近代化を進めていたのです。軍事的に強化され、EUとの関係も強くなり、かつてのような腐敗だらけのひどい国家から、それを克服しようという前向きな国家に変わってきたのです。

### 《2022年ロシア＝ウクライナ戦争》

プーチンは、2014年にあれだけ簡単にやれたのだから今回も大丈夫だろう、国際社会もせいぜい経済制裁を強めるだけだろうと考え、2022年にロシア＝ウクライナ戦争に踏み切りました。仮に最初の3～4日でキエフが陥落していれば、それで終わったと思います。ところが、強化されていたウクライナ軍が抵抗したわけで、これが大きかったです。ロシア軍も本格的に大国ウクライナに攻め込んでキエフを押さえるほど強くなく、むしろガタガタでした。そもそもロシア軍はチェチェンでもシリアでも、混乱しているところに非正規的な手段で入り、そこを攪乱するようなやり方でやっているものですから、国対国の本格的戦争となるとかなり弱かった。ロシアが思ったより弱く、ウクライナが思ったより強かったので、ウクライナが阻止できたわけです。そうすると欧米としてもこれは見捨てられないのではないかなって来たのです。プーチンの最初の狙いは、ゼレンスキー政権を打倒し、自分たちに都合のいいヤヌコーヴィチを復帰させ、半永久的にウクライナを自分たちの勢力に入れたかったということでしょう。

## 5. おわりに

戦争の行方は本当に分からないのですが、思ったより長期化しています。私の尊敬するイギリスの歴史家のリーベンという人が面白いことを言っています。「英帝国がいなくなった後のインドとパキスタンのように、巨大な帝国がなくなった後の力の空白地域で新しい勢力がナショナリズムを賭けて戦っているのだから簡単には終わらず長引く」と。ロシアは中国への依存を強めています、あまりいい展望はないだろうなという気はします。



### 《大義を信じるロシアのエリートたち》

この写真 (<http://deti.gov.ru/persons/lyovabelova>) の女性は、ウクライナの孤児とか普通に親がいる子を、ウクライナからさらってロシアに連れてくる総まとめをやっているマリア・リヴォヴァ＝ベローヴァという人物です。ルガンスク、ドネツク、クリミア辺りで、戦争中で大変だからサマーキャンプに連れて行ってあげます、一か月で帰ってきますよと。あるいは、占領地域から逃げようとするウクライナ人を検問で止め、親を拷問した上で子供だけ連れて行く。一説によると、2万人の子供がウクライナからロシアに移送されたと言われています。最近彼女とズームで話す機会がありましたが、彼女は自分の大義を信じていますから、自分は一貫して慈善活動をやっており、自分の仕事にはヒューマニズムしかないと言います。ロシア人もウクライナ人も区別せず、親がいなくなった孤児やネグレクトされている子供を連れてきているだけだ。ウクライナが具体的に個別の人名を出せば追跡調査して返すと、その一点張りで議論は平行線でした。彼女だけではなく、多分プーチンの下で育ってきた30代、40代のロシアのエリートはみんなそんな感じだと思います。ロシアは本気なので、簡単には終わらないだろうなということになります。

### 【質疑応答】

Q 昨年の開戦時プーチンが、ウクライナ政権をネオナチと非難したのはどういうことでしょうか。  
A ソ連、その後を継いだロシア、ウクライナにとって、ナチスは第二次世界大戦の最大の敵で、非常にネガティブな印象があります。ただ、その定義はかなり曖昧で、今プーチンが言っているのは、

人種差別とか民族差別をする奴らという意味です。ウクライナは、ロシア人やロシア語を喋る人を迫害し殺しているのだということです。実際オデッサやドンバスとかで、ロシア系ウクライナ人とウクライナ系ウクライナ人の対立がなかったかというとなわけではない。しかし、ゼレンスキー政権がそうした人種差別主義者の集まりだという話になると、荒唐無稽と言わざるを得ないです。

**Q** ウクライナの民主主義の現状と NATO 加盟の可能性はどうでしょうか。

**A** NATO 加盟はかつてに比べたらかなり現実的になってきています。問題のひとつは、腐敗とか民主主義の状況です。2014 年頃に比べれば、はるかに改善されていると思いますが、裁判所とか役人の腐敗は地方レベルではまだまだひどい。でもゼレンスキーとその周りの人たちはかなり真面目なんじゃないかなという印象があり、なんとか直していこうという意志は強いと思います。ただ、今のようなウクライナ頑張れみたいな気分がずっと続くとは限りません。これが 2 年、3 年経って小麦の価格がどんどん上がりインフレが進んだりすると、もういい加減やめるとなる可能性はあります。仮に半年、1 年で加盟できないとなると、可能性は減ってくるだろうと思います。おそらくゼレンスキーもそれが分かっているから、なるべく早くと言っているのだと思います。

**Q** ロシアの思考・行動パターンに影響を与えていると言われる 200 年を超えるタタールのくびきが、プーチンのウクライナ侵攻に何か影響を及ぼしていますか。

**A** 「ロシアは平野で大きな山もないので、攻められる恐れがいつもあり、タタールにやられた恐怖心やトラウマがある。そういうことから安全保障にはすごく気を配り、独ソ不可侵条約を結んだりした。今回もアメリカ・EU を恐れており、過剰なまでの防衛反応に出るのだ」というような言説があります。ただ最近では、それはかなりロシアに都合のいい考え方じゃないかとも言われ始めました。モンゴル＝タタールのくびきにやられたから自分たちは恐れていると言って、独ソ不可侵条約でポーランドを攻めるとか、今回の侵略を正当化することは出来ないだろうと思います。ただ、歴史学の見方は現状に結構影響されるのですが、それはそれで問題だとも言えます。

**Q** マイダン革命の前のオレンジ革命でも、民主的に選ばれた大統領が革命という暴力によって替えられたのを、ロシアが傀儡政権と見なすのは当然では。背後にアメリカの動きがあるのでは。

**A** 基本的には同じことの繰り返しで、ロシア系の大統領が出てくると、市民運動でその結果を覆すことを続けているわけです。プーチンの側からすれば、そういうやり方で無理やり EU などに近い人を据えてそれを承認するのは、ダブルスタンダードではないかということであり、私もそう考えます。ただ、CIA があの政権交代を工作したということではないと思います。いかにアメリカがやろうとしたところで万能ではなく、ウクライナの中にそうしたいという人がいればこそできることです。NATO が東方に進出してくるのをロシアが不安に思っているのはそのとおりでしょうが、西側との対抗姿勢を強め、EU の側につきたいという市民に、これは付き合えないというような状況を作り出しているのはプーチンです。プーチンが 2022 年 2 月から始めたことは、NATO が圧力をかけたからということではとても説明ができないくらいに暴力的なことと私は考えています。プーチン政権自体がかなり攻撃的な性格をもっており、拡張主義的に振舞っているとわざとを言わざるを得ないと思います。

## 池田嘉郎（いけだよしろう）先生のプロフィール

1971 年秋田県生まれ、父の千葉大学への転任に伴い幼少期に千葉県に転居。はじめ四街道ついで稲毛海岸、稲毛へ。

私立市川高校卒業後、東京大学文学部入学。学位は東京大学大学院人文社会系研究科博士(文学)。新潟国際情報大学講師、東京理科大学准教授を経て、東京大学大学院人文社会系研究科(西洋史学)教授。専門は近現代ロシア史。

主著：『革命ロシアの共和国とネイション』（山川出版社、2007 年）

『ロシア革命 破局の 8 か月』（岩波新書、2017 年）

訳書：ミヒャエル・シュテュルマー『プーチンと甦るロシア』（白水社、2009 年）

アンドレイ・プラトノフ『幸福なモスクワ』（2023 年）